

「武器」と「芸術」の国際語 ——JPEUとプロレタリア・エスペラント運動——

神村 和美

1. 戦間期の文化運動とエスペラント

「平成」の終焉が、西暦使用が一般化されつつある現代における元号規定の意味への問いを孕んでいたことは周知のとおりであろう。なお、二〇一八年に『大正＝歴史の踊り場とは何か 現代の起点を探る』⁽¹⁾を著した鷺田清一・山室信一は、「なぜ元号で区切るのか」という問いを提起しながら「世界史の一環としての同時期の日本を捉える適切な時期区分」を「大正」に見出し、真の意味でのグローバリゼーションの起点がこの時代に端を発することを指摘しているが⁽²⁾、このような視点は、文学が語られる場においては既に見られる類のものである。

例えば本多秋五は、小林多喜二の「一九二八年三月十五日」（『戦旗』1928年11・12月）が「まさに一九二八年であって、昭和三年であってはならぬ時代」を物語っていることを指摘した上で、「この種類の思考方法」は日露戦争後の「大正」期から育まれたものだとして述べ、白樺派の作家達の国際意識と切り結んでいる⁽³⁾。

また、『大正文学史』を著し、大正文学の史的再評価を行った臼井吉見は、『白樺』『三田文学』『新思潮』の創刊された明治四十三年（一九一〇年）から、「芥川龍之介が自殺した昭和二年にいたる期間」を「文学における大正期」と考えたいと語っているが⁽⁴⁾、日露戦争後の国内を席卷した国際意識、グローバリゼーションの起点という点から考察するならば、臼井が挙げた三つの文学潮流の中でも最も大正期を象徴しているのは、西洋美術を積極的に紹介し、〈新しき村〉に象徴されるトルストイズムを国内外に広めるなど、文学以外の文化運動を展開した白樺派ということになる。そして、白樺派やプロレタリア文学の作家達の歴史認識とは、彼らの文化運動が国境を越え、文学の範疇に留まらない拡がりを見せたように、近代天皇制における一世一元の時代区分による歴史の分節化を相対化する類のものであったといえる。

ところで、臼井が文学的観点から「大正」の始点とした一九一〇（明治四十三年）年を天皇制という観点から見返すと、大逆事件と韓国併合という二つの歴史的イベントが浮かび上がる。大逆事件以降、社会主義運動は所謂“冬の時代”に突入するが、一九一八（大正七）年の米騒動を境に民衆の政治に対する不満が表面化したことを皮

切りに、労働組合運動の発達、一九二二年の水平社の結成など、民衆の運動が高まりを見せ、ジャーナリズムもデモクラシーを煽動し、大正デモクラシーとよばれるリベラルな風潮が生まれたということは定説となっている。ただし、「内に立憲主義、外に帝国主義」という政治理念のもとに大正デモクラシーは始動したといわれるように、韓国併合に象徴されるような日本帝国主義の拡張に関しては、自由主義者でさえも批判の声を上げることは少なく、民本主義によってデモクラシーの風潮を理念化した吉野作造でさえ、当初は帝国主義的政策を否定することはできなかったということである⁽⁵⁾。

しかし、大正も半ばを過ぎた一九二一（大正十）年二月には、フランスにおけるクラテ運動に共鳴し、反戦平和・インターナショナリズムの理念を輸入した小牧近江・金子洋文により『種蒔く人』が創刊され、日本帝国主義を相対化する眼差しを有し、のちのプロレタリア文化運動の草分けとなる文化運動も生まれる。そして、このような理念と深く結びついたものの一つとして、エスペラント運動を挙げることができる。

エスペラントとは、ポーランド（当時はロシア領）のユダヤ人医師ラザル・ザメンホフが一八八七年に発表した人工国際語であり、“エスペラント”という名称は、当時ザメンホフが使用していたペンネーム“ザメンホフ博士”から派生したものである。

「人類解放の武器はエスペラント」と謳ったロマン・ロランの言葉を借りれば、エスペラントは、従来の「学者の言語と人民の言語」に分断されていた言語とは異なり、人類の統一と平和をもたらす新時代の言語として世界各国の進歩的知識人に迎え入れられた⁽⁶⁾。このような平等への志向と反戦平和の思想は、社会主義運動と結びつき、幾つかの潮流を持つエスペラント運動のなかでも、特にマルキシズムによる社会革命意識を有したエスペランティストの存在感は群を抜いていたといえる。

殊に、当時の日本は、先に触れたように帝国主義的な国策を推進させていたため、日本の左翼系エスペランティストたちは、植民地を支配する方法として日本語使用を強制する言語政策を含む同化政策に懐疑の眼を向け、日本帝国主義批判をおこなうようになる。

次は、植民地台湾でエスペラント運動を牽引し、女性差別問題の理論的解決をもエスペラントに見出そうとした山口小静が、「赤化なくして果して徹底的緑化が行はれ得るであろうか」という問題意識を提起した上で「台湾の民衆に向つてそれを説くに都合のよい好適例を握つてゐる」として挙げたエピソードである。

私は最近台湾当局の某高等刑事とエスペラントに就いて二三問答する機会を持った。彼は、一般台湾人の間にエスペラントが普及される事に就いて当局はこれを如何なる眼で見えてゐるか、といふ私の問に対して、次の如く答へた。『一般に

内地人がこれをやる場合と台湾人がやる場合とでは、かなり違つた意味に解されねばならない。例へば手紙の端にでも一九二二年と書かれてゐる場合、その筆者がもし内地人ならば単に世界共通の年号としてこれを使用したに過ぎないが、同じ事が台湾人によつて書かれた場合には、それは単にそれ丈の意味ではなくて、明らかに日本に厳存せる大正十一年といふ年号を無視し且つ排斥する心と見なければならぬ。同様に、同じくエスペラントを学習するにしても、内地人の場合には、単に世界の共通国際語として、来るべき人類平和の象徴語として、或は国語愛重の手段としてこれを選んだものである事を疑はないが、台湾人の場合には大いに事情が違つて来るのである。彼らは単に世界の一民としてこの世界語をやるのではなくて、一方に日本語排斥の意味を十分に含ませてあるのである。而して言語と思想との関係は密接であるから、日本語排斥は即ち日本そのものの排斥でなければならぬ。日本の植民地政策は断じてかゝる反逆者を黙許する事は出来ない。』

私はこの驚くべき僻見附会説が、単にこの一介の青年刑事の頭脳によつてのみ製せられてない事を推断するに苦まない。

(下線は引用者による)

(山口小静『匈牙利の労働革命』水曜会出版部 1923年6月)

日本のエスペラント運動史においてよく引用される山口のエピソードであるが、植民地における西暦使用やエスペラント使用が抗日分子を炙り出す根拠とされていることが示唆されており、エスペラント運動が帝国主義と闘うことなくしては存在できないと考えられてしかるべき状況が生々しく伝わってくる。また、昭和期に特高警察による捏造事件で命を奪われたエスペランティスト・斎藤秀一も、卒業論文に西暦を用い、ローマ字論とエスペラントをテーマにしたということで大学側から問題にされ、書き換えをさせられた経験があった⁽⁷⁾。このような例を考え合わせると、先に挙げた小林多喜二の小説のタイトルも、内国植民地・北海道の地から放たれた、天皇制及び帝国主義批判という意味が強く込められたものとして新たなイメージを纏って立ち上がってくるであろう。

このように、エスペラント運動は大正期のグローバリゼーションを背景に反帝国主義的な要素とも結びついてしたが、白樺派的なヒューマニズム、越境性に魅せられた経験を持つ多くの芸術家たちが身を投じたプロレタリア文化運動においても大きな発展を見せることとなる。

殊に、コミンテルンと繋がりを持ち天皇制を鋭く批判するなど、最もラディカルな性格を有したナップ（NAPF＝全日本無産者連盟）を発展させつつ引き継いだコップ（KOPF＝プロレタリア文化連盟）は、文学、演劇、美術、音楽、映画、写真などの芸術関係組織だけではなく、エスペラント、反宗教などの同盟組織も有していた。従

来、文学や演劇が注目されることが多いプロレタリア文化運動であるが、なかでもエスペラント運動に携わったJPEU (Japan Prolet-Esperantista Unio 日本プロレタリアエスペ란ティスト同盟 以下、ポエウ) の活動を見逃すことはできないであろう。あくまでも非政治的な言語運動としての立ち位置を貫く中立主義的なエスペラント学会や、体制に迎合する動きをみせる宗教系エスペラント団体に反旗を翻したポエウは、エスペラントを知識人だけのものとはせず、教育を受ける機会に恵まれなかった労働者階級にエスペラントを普及させることで、国際社会の土台となっている世界の労働者階級と繋がり、世界革命に貢献できる人材を育てようとしていたのである。

そこで、本論では、大正期から昭和初期にかけて、弾圧と闘いながら国際的發展をみせたプロレタリア文化運動において、エスペラント運動をめざましく発展させた組織・ポエウに焦点をあてる。

まず、日本のエスペラント運動史の俯瞰からはじめ、ポエウ結成までの軌跡とその画期性に触れた上で、後のポエウメンバーが編集し、プロレタリア・エスペラント運動のなかでも大成功を収めたといわれる『プロレタリア・エスペラント講座』(全六巻 鉄塔書院 1930年9月～31年10月)、及びポエウによる大衆啓蒙雑誌で、最盛期は二五〇〇部を発行し「素晴らしい編集ぶり」をみせたといわれる『カマラード』⁽⁸⁾の分析・考察を通し、日本におけるプロレタリア・エスペラント運動の特徴を明らかにしたい。

2. エスペラントの日本上陸と普及運動の変遷

ところで、田中克彦『エスペラント—異端の言語』(岩波新書 2007年)によると、日本にエスペラントが上陸したのは明治三十年代であり、アジアでは最も早かったという。ただしその経路は二つあり、一方は在日キリスト教メソジスト派宣教師によるもの、もう一方はウラジオストクでエスペラントを独習した二葉亭四迷によるものであったということである。そして、一九〇六(明治三十九)年には、「日本国内でエスペラントに触れた人」や「海外でエスペラントを学んで持ち帰った人」によって、JEA (日本エスペラント協会 Japana Eesperantista Asocio) が創立され、二葉亭四迷の書いた日本最初のエスペラント入門書『世界語』(彩雲閣 1906年)が出版されている。

なお、JEAの中心人物には、日本社会主義運動の先駆者である堺利彦や、アナーキズムとエスペラントを結び付け、中国人留学生のためにエスペラント講習会を開き、中国へのエスペラント流入という役割を果たした大杉栄などもいたということであり⁽⁹⁾、当初は、それぞれ立場・思想の異なる知識人が一丸となって運動が進められていたようである。

ちなみに、非常に早い段階で、エスペラントについての記事『エスペラント語の話』（『週刊直言』第二巻第七号 1935年3月19日）を発表した堺利彦は、「仏国の社会党がこのエスペラントを世界語と認め、その戦士に学習を奨励する決議をした」という「事実になみな」記事を書いたと述べており、当初から社会主義運動とエスペラント普及とを結びつけるスタンスを表明している。

また、『反体制エスペラント運動史』（大島義夫・宮本正男 三省堂 1987年）によると、日本のエスペランティスト層は、第一に自然科学者たち、第二に、自由主義者、人道主義者、社会主義者たち、第三に北一輝に代表されるウルトラ・ナショナリスト、第四に語学的興味からエスペラントを学ぶ学習者たち、第五に切手収集や外国旅行を趣味に持つ実益者と、大きく五つに分類することができるということであるが⁽¹⁰⁾、ザメンホフがエスペラントを生み出さずにはいられなかった背景——祖国の領土や言葉を奪われ、頻発する〈ボグロム〉⁽¹¹⁾に怯えるロシアのユダヤ人がおかれた凄惨な状況——を想起すると、民族や宗教を超えて人々が真の交流を実現する世界の実現を願ったザメンホフの精神に寄り添うことができるのは、民族差別や帝国主義との闘争を掲げた第二の層ということになる。

また、各国の詳細なエスペラント受容史を記録したウルリッヒ・リンス『危険な言語』（訳：栗栖継 岩波新書 1975年）によると、中国でエスペラント運動が開花しえなかったのは「政治的不安定や大衆の経済的窮乏、戦争といった全般的要因」があったためであり、一方日本では「ありとあらゆるグループが、自分たちの目的にエスペラントが役立つことを発見した」という現象がみられたという。

なお、リンスは、戦間期における日本の知識人層が、エスペラントにどのような理念を見出していたかを明らかにするために、文化雑誌の表紙を飾っていたエスペラントのサブタイトルを列挙し、エスペラントと社会改革への信念が強く結びついていた当時の日本の状況に触れているが、一九一九年に小坂弼二らによって創立された日本エスペラント学会（JEI）が、エスペラントの信奉者を得るためにザメンホフの人道主義的思想に訴える戦略をとったこと、その動きに対し異議を唱えた千布利雄らの中立主義の見地が一九二四年に採用されたこと、その結果として、他民族間の友好を唱えながらも、関東大震災の際の朝鮮人虐殺事件などの極端なケースに対してさえ沈黙をきめこむ、社会的に無力な存在であることに甘んじなくてはならなくなったことについても言及している。

また、後で詳しく触れる『プロレタリア・エスペラント講座』第3巻（鉄塔書院 1930年12月）「第4週7日」の「総論 エスペラントの歴史（終）」には、「大正末期には日本のエスペラント学会の運動も理想主義（小坂氏のザメンホフ主義人類主義）と現実主義（千布氏のプーロン主義）——実証エスペラント主義（川原氏）等の分離が起こった」と書かれていることから、中立主義の立場が採用されたとはいえ、エス

ペラント学会もまた一枚岩ではなかったのであろう。ただし、大正期に出版されたエスペラント関係の書籍を調査すると、小坂狷二、千布利雄、川原次吉郎の著作が多く散見でき、当時はエスペラント学会による普及運動が主流であったことが窺える。

それではここで、この時期に特に多くの著作を刊行した「実証エスペラント主義」者・川原次吉郎の『エスペラント概論』（エスペラント同人社 1923年）を紐解いてみたい。

川原は、日本人の「外国崇拜病」は、「外国語を学ばなければならぬ」ために起こったものであり、「幼い時から漢字、中等学校では英語、高等学校では独逸語フランス語」を学習するも、「優等生と自惚れて居る人々でも外国人と出会すればもう何も出来ないことが多い」という、現代にも通じる語学コンプレックスの実情を述べている。また、「外国に勝たんとすれば唯沈黙して銃剣突撃を行ふ外はないと考ふるに至るには無理もない。世界は日本を「好戦国」と知るのみで、日本に「文学があり詩歌があり、人文道徳がある」とは知らない。是れ今日世界に漲れる排日の根本原因ではないか。（中略）他の国がエスペラントを採用しやうとしまいとに關せず日本には日本独特の理由からエスペラントを採用する必要がある。」といった文言もみられる。つまり、エスペラントの採用が、「排日の根本原因」を取り除き、国際社会における日本の国家としての立ち位置の改善に繋がるものであるということが明言されている。

リンスの著作『危険な言語』のタイトルが示すように、エスペラントは、東西を問わず権力者側から危険視される傾向があり、日本エスペラント学会が結果的に中立主義を貫かざるをえなかったのは当局の弾圧を避けるためであったということは頷けるが、国家主義的イデオロギーの匂いすら漂わせている川原のいうところの「世界」とは、先進国である欧米列強のみを指すように感じられ、帝国日本が言語帝国主義による統治を押し付けている朝鮮や台湾にも「文学があり詩歌があり、人文道徳がある」ことに関しては全く意識が向けられていないことが見てとれる。「他の国がエスペラントを採用しやうとしまいとに關せず」という表現からも、他国の人びととのコミュニケーションはエスペラント習得の目的には数えられないようである。

しかし、このような単眼的な中立主義的エスペラント運動は、一九三一年に創立されたポエウによって相対化、批判されてゆくことになる。さらにポエウは、一九三一年十一月に結成されたコップ^{イ-ベ}に加盟し、のちにIPE（プロレタリア・エスペラント・インターナショナル）日本支部となるなど、モルプ（国際革命作家同盟）に加盟したナルプ（プロレタリア作家同盟）と並ぶ国際的活躍をみせる。

なお、次は『戦旗』一九三一年八・九月合併号に掲載された「ポエウとその活動」という文章の一部である。

エスペラントが日本の労働者農民諸君に国際プロレタリアートの団結の為に、プロレタリア文化教育活動の一武器として、はつきり認められ、その生活の中に取り入れられて来たのは極めて最近のことで、日本のプロレタリア・エスペラント運動は未だ若い、だが当面の必要性から急速にプロレタリアートの中に確固たる力を以て拡大しつつある。

ポエウは大衆的文化団体である。その組織は地方別、地域別、職場別になされている。(中略)

国際的通信は我々の最も重要な活動で、個人的通信は勿論、海外の諸団体との集団的通信(班、地区、支部による)によつて各国兄弟達と直接手を結びあつてゐる。世界経済恐慌の深刻化、帝国主義戦争の危機の切迫、世界ブルジョア共の陰謀と、プロレタリアの祖国サヴート同盟に対する、醜悪なデマを粉碎し、社会主義建設の輝かしい成功を直接に知るために、国際通信運動は更に一層強化されなければならない。

(日本プロレタリア・エスペ란ティスト同盟「ポエウとその活動」『戦旗』1931年8・9月合併号)

この文章は、エスペラントが「国際プロレタリアートの団結」を目指す「プロレタリア文化教育活動」の「一武器」として捉えられていること、ポエウの活動の目的が帝国主義戦争阻止とロシアに倣った社会主義建設にあることを明白に物語っている。また、本部をベルリンに置く「国際的通信運動の最も発達した形態PEK(プロレタリア・エスペラント国際通信)」(括弧：引用者)の日本支部が既にポエウ内に組織されており、機関紙の日本語版の発行や、各団体に対し国際記事を提供するという任務を遂行しつつあるということが述べられている。現実的な国際連帯のツールとしてのエスペラントの有効性が示されているといえよう。

なお、ポエウの前身団体は、一九三〇年七月に立ち上げられたポエア(Japana Prolet-Esperantista Asocio 日本プロレタリア・エスペ란ティスト協会)である。メンバーは、プロレタリア科学研究所エスペラント研究会の秋田雨雀、佐々木孝丸、武藤丸楠、伊東三郎、新島繁、中垣虎児郎、大島義夫であり、機関誌『プロレタリア科学』を刊行する傍ら、学生や知識人、労働者をそれぞれ対象とした二種類の講座を開講していたということである。

そして、このような教育活動と並行して進められていたのが、先にも挙げたプロレタリア科学研究所エスペラント研究会編『プロレタリア・エスペラント講座』であった⁽¹²⁾。それでは、次章において、『プロレタリア・エスペラント講座』とその背景について整理していきたい。

3. 「武器」・「芸術の為の言葉」としてのエスペラント

プロレタリア科学研究所エスペラント研究会のメンバーの一人であった中垣虎児郎は、優れたエスペランティストであり、数々の文学作品のエスペラント訳をこなすだけでなく、講師としてエスペラント教育にも貢献し、後に長谷川テルの夫となる劉仁を含む中国人留学生たちにエスペラントを教授したという人物である⁽¹³⁾。また、中垣は、『プロレタリア・エスペラント講座』第一巻発行の一月前に、“西東なほみち”というペンネームで『戦旗』誌上に「エスペラントとプロレタリア」(『戦旗』1930年8月)を発表している。

この論文は、「エスペラントが何故 プロレタリアートの武器になるか」「エスペラントはどれだけひろまってるか」「エスペラントを学ぶには」という三つの問いについて詳細に答えてゆくという形式で展開されている。

ちなみに、最初の問いの答えは「一、団結の為に」「二、国語の批判の為に」というものであり、エスペラントを習得することによって、「労働者農民の汗と血の犠牲による長い年月と多額の金とを費して外国語を学んだインテリゲンチヤの助けをかりないと何も出来ないといふ」状態から脱し、プロレタリアートの戦線を統一強化するということが述べられている。また、「二、国語の批判の為に」には、次のような文章が記されている。

日本語のことは意味深長で芸術的だといふ。それはいひかへれば非科学的であ
いまいでごまかすのに都合がよいといふ事だ。大衆が支配階級や社会民主主義者
のゴマカシやデマに乗せられるのも一つは日本語のあいまいさのせいだ。マルク
スやレーニンの思想をむづかしいものゝやうに思ふのも一つは非科学的な日本語
のせいだ。 (下線は引用者による)

(西東なほみち「エスペラントとプロレタリア」『戦旗』1930年8月)

「ゴマカシ」や「デマ」に惑わされる原因は個人の問題ではなく、「日本語のあいまいさ」「非科学的」という点にあるとされ、「敵」の言葉による「欺瞞」を見破るために、国語を批判する視点を育むエスペラントが必要であるとされている。プロレタリア文化運動では、労働者階級のリテラシーを高めることが喫緊の問題として捉えられていたことが伝わってくる。

そして、『プロレタリア・エスペラント講座』第1巻月報には、本講座は「従来一切のブルジョア的言語学の批判によつて成つた、プロレタリア科学の立場からする言語理論に基いて書かれて」おり、「人類の使ふ言語そのものを正しい立場に立つて見なほして」「真に生活と闘争の武器としての新しい言葉の体得のために書かれたもの」

の嚆矢であると記されている。

なお、第3巻の216頁「総論 エスペラントの歴史（終）」では、日本のエスペラント運動の歴史が述べられているが、講座の編者であるプロレタリア科学研究所の前身である国際文化研究所からさらに遡り、国際文化研究所の前身であった「エスペラント青年同盟」についても触れられており、この段階からすでに「エスペラント運動の指導理論を科学的に確立しようとする」傾向が意識されていたことが記されている。

プロレタリア文化運動では「科学」が一つのキーワードであったが、エスペラント運動においてもまた然りであり、「科学」の立場から人工語であるエスペラントを教授し、「非科学的」な日本語を相対化することが一つの課題とされていたことが窺える。

また、中垣は、一九二七年にソヴェート体験をした秋田雨雀の「ソウェート・ロシヤに於けるエスペラント運動」（『若きソウェート・ロシヤ』叢文閣 1929年10月）を引用したうえで、ソヴェート同盟におけるエスペラント運動が、ピオニーロや郵便電話通信、労働者教育のなかに入り込んでいるという現実があること、ソヴェート・ロシヤでエスペラント運動が隆盛をきわめているということは、エスペラントが有力な言語であることの顕れであると述べる。

今日的な観点からすると、このようなソヴェートへの絶対的な信頼は、かの地のエスペラント運動がまもなくスターリンによる激しい粛清の波に洗われることなど想像もつかなかった当時の日本の運動の様相を感じさせ、ある種の感慨を起こさせることは否めない。

ただし、日本を代表するエスペランティストでチェコ文学者の栗栖継は、この論文に非常な感銘を受けたことを契機にエスペラントを習得している。弾圧下のプロレタリア・エスペラント通信員としての栗栖の国際的活動はもちろんのこと、ポエウ壊滅後もモスクワのエクレロ（革命的エスペラント図書出版協同組合）からの依頼に応え、小林多喜二の「蟹工船」をエスペラント訳したこと、そして彼のエスペラント訳からスロヴァキア語訳「蟹工船」が生まれたこと、文学作品の翻訳経験からエスペラントと文学を取り結び、戦後日本のエスペラント運動に大きく関わったことなど、栗栖の功績は枚挙にいとまがない⁽¹⁴⁾。中垣の戦旗誌上での呼びかけが大きな実を結んだことは間違いないといえるであろう。

そして、中垣論文発表の一月後には、『プロレタリア・エスペラント講座』の刊行が始まり、第1巻は約八〇〇〇部を売り上げるという快挙を成し遂げている⁽¹⁵⁾。直前の『戦旗』誌上の中垣論文と同誌上の大広告の相乗効果の影響も想像されよう。

それでは、「プロレタリア科学」の言語理論によって導かれたとされる『プロレタリア・エスペラント講座』の内容を具体的に見ていきたい。

「知識は力である」から始まる第1巻前書きには、「講座の全体を貫く方針」として

次のような文言が記されている。

我々は、今こそ、我々の社会生活に関してはつきりした知識を捉へよう。一つの言語に関する技術の法則を知り、これを駆使することが出来ても、我々の社会生活に関する正しい知識を持つていないならば、言語の技術の法則を真実に有効に使ふことは出来ない。だから本書では、エスペラントの技術の法則と同時に、我らの社会生活に関する正しい認識をも掴むことに努力する。

さらに「学習を始めるに当つて忘れてはならない」事柄として、「人類の社会生活と言語の関係」「言語そのものについて」「言語の法則についての知識」「言語の学習方法及び実際の使用についての種々な問題」が挙げられ、その究明に注力するということも宣言されている。ちなみに、第1巻はほぼ一ヵ月でマスターできるように設計されており、習得の秘訣として「必ず物にする」という確信、「吞んでかゝること」「ばかになつてかゝること」といったものが挙げられている。

また、現代の一般的な語学入門書は、アルファベットの表示から始まることが多いが、この講座では、身近な事物を表す単語から一通りの発音と文字を学習した後、第2週5日に入ってからのはじめてアルファベットの表示がなされていることも特徴的である。

学習の進め方としては、一日につき、言語論関係の読み物（A）と「発音及び文字」（B）の二方面からの学習が課せられている。例えば、「第1週1日」の「A」は「総論 我々の生活と言語との関係」であり、聖書における「太初に言あり」という言葉が引かれ、肉体労働とは無縁な支配階級には言葉が世界を創り出すかのように見えているが、そうではなく、言葉は社会生活のなかから生まれ、労働を保証として力を発揮すると述べられ、いわゆる「言語論的転回」といわれる思考が批判されている。続く「B」では、“mamo”（乳房），“amo”（愛）“mano”（手）などの、有声両唇鼻音〔m〕が含まれた名詞が、乳児に授乳する母親のカットと共に提示される。また、発音のポイントと口腔断面図も記され、筆記体も大きく示されるなど、視覚に訴えるレイアウトを用いて、四技能を並行して伸ばそうとする工夫がみられる。

そして、「第1週7日」の「A 総括」では、「この言語は階級や民族の対立のない将来の社会においてはじめて完全な世界語となり得る。しかもかゝる社会を造り出すことが出来るのは世界プロレタリアートにおいて他にはない。エスペラントはプロレタリアートの世界的団結＝闘争の武器として用ひられてはじめて、将来の世界語として発展し得るのである」という文章が記され、対立のない、あるべき社会の到来のための「闘争の武器」としてのエスペラントの存在価値が強調されている。もちろん、テキストに採られている単語も、“laboristo”（労働者）“ruĝa”（赤い）“ĉelo”（細胞）

“hegemonio”（ヘゲモニー）など、アジテーションに用いられる類のものが多い。そして、プロレタリア前衛美術的なテイストのカットや、ソヴェート同盟の少数民族やコミンテルン放送局の写真なども載せられており、この講座が、革命推進中のソヴェートと地続きの国際的なプロレタリア解放運動へのスプリングボードとしての役割を担っていることが見て取れる。

また、第2巻からは、文法の項目、会話文、一人称独白体の文章、「C 練習」（日本語の文をエスペラントに訳す練習）などが新たに加わり、エスペラントの歴史についてのコラムも載せられている。

第3巻も構成はほぼ第2巻と同じであるが、その文例は、「宣伝演説会」「ロシア革命」「カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグ」といったものとなり、共産主義への啓蒙メディアとしての性格が強まっている。ちなみに、「第1週」（6日間）の文例となっている「工場での1日」のストーリーは、父を亡くした少年〈源太〉が工場労働者となり、朝鮮から来た工場労働者と「同志」と呼び合う仲になるというものであり、工場の機械に関する語彙がまとめて学べるようになっている。

第4巻は、プロレタリア芸術への興味を促す内容となっており、文例のテーマには「日本に於けるプロレタリア芸術運動」「『太陽のない街』を見る」などがみられ、第4週7日には、“Kanto de Varsovia Laboristaro”（ワルシャワ労働歌）の楽譜も掲載されている。

また、「第2週6日」の「総論」は、「芸術とエスペラント」というものである。従来は、翻訳によって名著が「世界文学」たり得ていたが、エスペラントという方法を用いると直接的に世界文学が生み出されるということ、エスペラントこそ「我々の芸術の為の言葉」であり、人工語という意味だけでなく「芸術的に作られた言語」という意味も持ちうるということが記されている。エスペラントとプロレタリア芸術との繋がりに関する見解を窺うことができ、「武器」としてだけではなく、「芸術」としてのエスペラントという側面にも言及されている点が興味深い。

なお、この巻の月報には、ポエウへの加盟を希望する読者の多いことが記され、規約「本同盟は本同盟の規約綱領諸決議を遵守する日本内地及び植民地のプロレタリア・エスペランティストを以て構成す」が示されている。そして、希望者は創立大会報告書を確認後、入会手続きをするよう勧めている。

第5巻は、すべてエスペラント語の文例集（訳文なし）になっており、5パートに分けられている。パート1（UNUA PARTO）は、短い会話文による笑い話（Humoraĵoj）やなぞなぞ（Enigmaĵoj）など軽めの文例が多く採られている。パート2（DUA PARTO）はザメンホフに関する文章や言葉に関連するものであり、パート3（TRIA PARTO）になると、地殻科学（La kemio de la terkrusto kaj ĝiaj leĝoj）や数学（Matematiko）などの自然科学がテーマのもの、そしてレーニンの「マル

クス主義の三つの源泉と三つの構成部分」(*Tri fontoj kaj tri konsisto-partoj de Marksismo*) や、スターリンの文章などが採られている。

そして、パート4(KVARA PARTO)は、マヤコフスキーの詩などの文学作品、パート5(KVINA PARTO)は、エンゲルスの「カール マルクス」、レーニンのゴリキーへの手紙(*Letero de Lenin al M.Gorki*)、ザメンホフの著作の前書き(*Antaŭparolo*)、ウクライナのエスペラント運動の広報の紹介やSAT (Sennacieca Asocio Tutmonda = 全世界脱民族性協会) のビラなど、プロレタリア・エスペラント運動の政治的立場を確認させるような内容となっている。

なお、最終巻である第6巻は、文学作品のアンソロジー (Antologio) となっている。訳文や写真は一切ない。パート1・2は、エスペラントで書かれた新しい海外プロレタリア文学作品が採られている。注目すべきはパート3で、同時代の日本のプロレタリア文学のエスペラントの抄訳が載っている。

徳永直「太陽のない街」(*Strato Sensuna*)、黒島伝治「櫓」(*La Glitveturiloj*)、窪川稲子「キャラメル工場から」(*El Karamel-fabriko*)、中野重治「鉄の話」(*Historio de Tecu*)、藤森成吉「土堤の大会」(*Kongreso sur Digo*) といったラインナップであるが、やはりここでも「太陽のない街」が採用されており、労働者の間では人気の高い作品であることが窺える。

そしてパート4は、アンデルセン「裸の王様」、シェークスピア「ハムレット」、ポーランドの婦人作家オルゼシュコ「マルタ」、ゴーゴリの「検察官」といった海外の名作が並んでいる。また、巻末の“ALDONO”(補足) には、ブルジョア団体も含めた各国のエスペラント団体一覧やエスペラント運動の公的機関の組織図が示されている。

以上、『プロレタリア・エスペラント講座』を大まかに概観してみたが、読者からの声を反映させた月報編集も含め、「プロレタリア科学」の立場から学習者のモチベーションの持続と学習者オートノミーを確立させようと奮起した編者たちの情熱の痕跡が生々しく伝わってくる。ただし、編者が注力した理論パートは、読者にとって骨の折れるものであったことを示唆する資料もあり⁽¹⁶⁾、エスペランティストたちから高い評価を受けたこの講座が、真の意味で大衆性を獲得できたか否かはさらなる調査が必要である。

また、世界におけるエスペラント運動の新情報を提示しつつ、なぜ今エスペラントの習得が必要なのかを訴えかけ、読者に一刻も早い運動への参加を呼び掛け続けた編者たちの理想とするプロレタリア・エスペランティストとは、社会科学に関する知識はもちろん、文学などの芸術に関する豊かな教養を身につけた存在であったように思われる。殊に、第4巻からは、単にエスペラントを駆使できるだけでなく、エスペラントで演劇を語り、文学を生み出すことのできるプロレタリア芸術の担い手の育成

も視野に入れられていたことが窺える。

4. 大衆啓蒙雑誌『カマラード』

そして、ポエウが遺したもう一つの大きな仕事に、大衆啓蒙雑誌『カマラード』がある。“カマラード”(kamarado)とは、“同志”、“仲間”という意味であり、一九三一年十月に創刊され、一九三三年五月まで刊行された。なお、この雑誌のコンセプトは、「まだ勉強のつてが非常にすくない日本のプロ・エスペランティストに毎月適当な読物を供給するといふこと、同時に、まだエスペラントについて何も知らない人にエスペラントを宣伝し、普及するといふことを大きな任務としてゐる」(「仲間をつくるには」『カマラード』1932年2月)というものである。

元々は、『プロレタリア・エスペラント講座』と同じく鉄塔書院が発行元であり、最盛時は二五〇〇部を発行したが⁽¹⁷⁾、弾圧が激しくなり、発禁が度重なったことにより鉄塔書院は手を引いてしまったということである⁽¹⁸⁾。特に弾圧が激化した一九三三年の『カマラード』は、手書きガリ版刷りの非常に粗末なもので、潰滅直前の組織の姿を彷彿させ痛々しいが、「上海反戦会議」支持を訴える文章などが遺されており、歴史的な価値は測り知れない。この資料については後で詳しく紹介する。

それでは、まず、創刊から一月後の一九三一年十一月号を例にとって見ていきたい。巻頭は『戦旗』と同様、“グラフ”から始まる。「歓談するスターリンとゴルキー」「×衛軍司令部会議 コレスコフ画」「1919年の×軍」「鋭い墓」の丘の占領軍」「×衛軍のクレムリン入場」などの“グラフ”は、〈ソヴェートの同志N・ルヴオフ〉が『カマラード』のために送ってきたとされ、最初からソヴェートとの連帯が強調されている。この後は、やはり『カマラード』へ特別寄稿されたとされるD・スネジコ「百年の沼の中にレーニンの電燈が!」、河野直道「エスペラント初等講座」、高木弘「キムとローザ」(中等講座)、プロレタリア日用語、泉茂男「作文研究・作文添削」へと続く。

なお、河野の初等講座には「講義の仕方に不満があるとか注文があるとかもつという方法を思ひついた人はどしどしいつてよこしてほしい。」という文言や、泉の作文講座には「読者諸君から作文を提出してもらつて、その添削をやることにする。作文上の質問もドシドシ出せ」といったものがみられ、学習者にアウトプットの機会を与えるだけではなく、学習者とのコミュニケーションを重要視し、彼らの意見を雑誌作りに反映させようとする姿勢が窺える。

また、「エスペラントの本を読む場合吾々に最も必要なのは徹底的精読である。従来所謂中立主義的皮相な凡俗的態度は絶対に排撃されるべきである。何故ならばかかる態度はプロレタリア・エスペラントにとって恐るべき日和見主義であるからであ

る。」(泉茂男) という文章や、「京都全国エス大会の記」における、「大本, 仏教, kristano, 希望社など宗教系の団体」による「宗教的エス運動では, esp.が大衆のものになり切らない」「中立主義批判などよりも, 実際的な働きかけの方が数倍運動にとつて利益をもたらすのだ」といった批判から, いわゆるブルジョア・エスペラント団体への対峙が明らかにされている点も特徴的である。

なお, 中垣虎児郎による徳永直「豊年飢饉」のエスペラント訳もあるが, この雑誌が単に読み物を供給するだけではないということは, ソヴェートのソフホーズで使用されているトラクターの馬力や効率性を, 〈甲〉と〈乙〉の会話形式で説明した園部四郎「トラクターの話」が, 「トラクター応募基金」という基金活動と連携するなど, 農民運動の一環としての役割も担っていたことや, 通信欄において, 「ソヴェト同盟・ドイツ・フランス・オーストリー」の組織における日本の同志との通信希望者の紹介がなされていることから窺える。

殊に「トラクター」については, 『プロレタリア・エスペラント講座』第2巻の「第2週1日」の文例「農村で」においても写真付きで紹介され, 旧式の鋤と鍬で耕作する日本の遅れた農業と, トラクターを使用するソヴェート・ロシアとの違いが描き出され, 月報では農業に携わる学習者のトラクターへの関心も紹介されている。農業システムの改善は, 当時のプロレタリア文化運動が掲げた現実的な課題の一つであったのであろう。

次に, 『カマラード』一九三二年二月号を取り上げたい。この号における山本五郎「講習会の経験から」は, ポエウ監修のテキスト“La Teksto Unua”がいかにすぐれているかということが, 講師の立場から次のように語られている。

(小坂狷二の「捷徑」を講習会に使ったが)

内容が自分たちの生活とかけ離れたことで充たされてゐる上に, 文法の講義が大部分で, 会話又は日常生活を表現しようとする時に vortoj (言葉) が, 仲々出てこない。それは結局, 文法をつめこもうとしすぎたからだと判つたので皆と相談の上, P.E.U. の La teksto unua を副読本にしようと決まった。(中略) 内容が非常に面白く生活と結ばれてゐる上に, 帰納的に教へよ^{ママ}おとしてあるから (中略) Teksto unua の方でハツキリと頭に入つて, 却つて文法もよく分り, 会話の上にも進歩を見た。

(山本五郎「講習会の経験から」／『カマラード』1932年2月 括弧・ルビは引用者による)

山本の文章は, 学習者の生活に密着した教材から帰納的に教える教授法の有効性, 文法の詰め込みが好ましくないことなどが語られている。『カマラード』読者層には, エスペラント学習者のみならず, 教授する側の人間や, ファシリテーターもいた

ことは考えられ、このような現場の講師の報告は非常に参考になったのではないだろうか。

他にも、この号では北海道の飢饉地への救援金の取り次ぎなどの活動についても記され、地方との連帯の様相も窺えるが、一方で「鉄道工場、海軍工廠その他の官営工場においてエスペランティストであることを理由にした戕害がはじまった」という記事もあり、当局によるエスペラント運動への締め付けが日々強まっていることが想像できる。

また、次に一九三二年三月号を紐解いてみたい。この号の「外国同志からの手紙」（カットの絵はソヴェート同盟の労働者が送ってきたものとされている）というコーナーには、当時の読者の関心を引き起こすこと必至の「ソヴェートの性生活」という記事がある。

ソヴェートの若者である〈ペートル〉という人物が、日本人の同志〈M〉の質問に答えるという形式で書かれているのであるが、〈ペートル〉は、恋人の女性と婚姻せずに「夫婦生活」をしており、彼女が妊娠した場合はその子どもを育てるつもりであると述べている。彼によると、ソヴェートでは「恋愛観をマルクス主義的に訓練して」おり、「我々意識的青年」は「未だ意識水準の低い青年」に対し、「我々の生活して居る様にする事は必要であり、そして性に就て不自然な行為をなくするやうに意識化し、性問題を正しく観なければならぬといふことを説明して居る」、「プロレタリアは如何にして、性生活をしなければならぬか、如何に我々は倫理的でなければならぬか？といふ事を、例を以て示す事、これが我々××主義者の意識的プロレタリアの任務である（略）」と語っている。

日本の若き左翼活動家たちにコロンタイの「赤い恋」が支持されたこと、一九三〇年には今野賢三『プロレタリア恋愛観 如何に新しく恋愛すべきか』（世界社 1930年）が出版されていること、そしてエスペラント運動のなかでもよく取り上げられる徳永直の作品に「赤い恋以上」（『新潮』1931年1月）があることなどを想起すると、当時の日本の左翼活動家が憧憬を抱いたソヴェートの活動家が、恋愛観や「性生活」について告白したこの記事が、若い読者の高い関心をいかに集めたかは想像に難くない。

また、もう一つの興味深いコーナーに「ドイツだより」がある。一九三二年四月号には、〈Zeilhofer Josef〉という人物から送られたとされる「俺たちのスポーツ 裸体体育サークルの写真」という男女入り乱れた集団裸体写真があり、続く五・六月合併号では、前号と同じく〈同志 Zeilhofer〉からの寄稿として「ミュンヘン・プロレタリア裸体文化の紹介」の記事が掲載されている。そして、裸体文化の効能として、「身体の鍛錬」「人間を理想的に教育」できること、「内面的な自由」の獲得などが主張されている。

つまり、このように日本の因習や常識を覆すような海外からの記事を随時掲載していた『カマラード』は、プロレタリア・エスペラント運動の普及という側面だけではなく、海外のアヴァンギャルドムーヴメントを紹介するという役割も担っていたということも考えられるであろう。

それでは最後に、激しい弾圧による転向の時代の幕開けともいえる一九三三年の『カマラード』(1933年5月号)を紐解いてみたい。先に触れたように、この号は手書きガリ版刷りであり、タイトルも『MAJO 1933年 LA KAMARADO』となっている。

巻頭論文は、堀地伸「戦争とエスペラントー上海反戦大会を支持せよー」であるが、この時点から数えて三カ月前に築地署で即日虐殺された小林多喜二も、国際反戦委員会の課題であった上海の極東反戦会議の立ち上げに奔走しており、その準備のさなかに斃れたことは明らかであることから⁽¹⁹⁾、日本のプロレタリア文化運動全体にとって、この国際的プロジェクトは非常に重要な仕事の一つであったといえる。

堀地はまず、アンリ・バルビュスやロマン・ロランが提唱した国際反戦会議が、一九三二年八月にベルリンで開かれ、「30余国3千万人以上の勤労大衆を代表する5千人のあらゆる種類の代ギ員を送って、三日間に亘り、どの様にして戦争を終結させるか、その戦争をどの様にして吾々自身の解放のための戦争にすべきかを自由、熱心に討議し、文字通り広汎な勤労大衆の帝国主義戦争反対の偉大な意志を示威する歴史的会議を開くことに成功した」と記す。また、片山潜の提案により、日本帝国主義政府の弾圧——共産主義者やプロレタリア文化団体へのテロルに対する抗議が可決されたと述べている。これらのことから、日本における左翼運動への弾圧は、文化人の間では国際的に知られていたことが窺える。多喜二虐殺に対し、魯迅やロマン・ロランがいち早く追悼声明を発表した背景には、一九三二年に開かれた国際反戦会議の存在があったのであろう。

また、堀地は、迫りくる戦争に対し、プロレタリア・エスペランティストはいかに行動すべきかという問題を提起し、「大本が軍部と手を握り、エスペラントを敵の手に役立てつゝある」こと、「下からの統一戦線によつて大本を打倒する」ことこそが、上海反戦会議支持の「吾々の具体的任務」であるとしている。

そして、「汎太平洋統一委員会に参加し、汎太平洋諸国、特に植民地半植民地の労働者農民のエスペラント団体創設及びその拡大強化のために援助し、汎太平洋における反戦争□の巨大な統一戦線の一翼の主導者とならねばならぬ。かゝる活動を通じてのみ吾々は上海における極東反戦会議の成功的遂行のための支持者となり得るのであるし、国際プロレタリアートの前に、それによって課されたわれわれの責任を遂行することゝなるのである。」(□は判読不能)というように、「具体的任務」の内容がまとめられている。

このように、一九三三年五月号『カマラード』は、第二次世界大戦前夜のプロレタ

リア文化運動の闘いとその具体的な闘争方法が記録されているという点において、資料的価値は非常に高いといえるであろう。

日本のプロレタリア文化運動の活動家たちが命を懸けた上海反戦会議は、一九三三年九月二十九日、「婚礼」というカムフラージュを用いて上海虹口で開かれた。結果的には戦争を食い止めることはできなかったが、帝国主義戦争に反対する国際連帯組織が、多くの芸術家、文化人の努力によって持ちこたえられていたことは特筆すべきであろう⁽²⁰⁾。

また、弾圧という形で文化運動に手を下した当局に対しては何ら批判せず、反帝国主義戦争を掲げたプロレタリア文化運動に身を投じた人びとに対し、その教条主義や政治主義が自殺行為であったとする非難が見受けられるが⁽²¹⁾、他国への侵略、他民族の蹂躪、そして帝国主義戦争という政治的問題に対して、武力ではなく文化運動を「武器」として挑むには、やはりそれなりの政治性は必要なのではないだろうか。そして、今後の国際社会のあり方を模索するにあたり、このような人びとの闘いの歴史を先入観に曇らされない眼で捉えるということがますます重要になりつつあるように思われてならない。

5. プロレタリア文化運動とエスペランティスト

—秋田雨雀を中心に—

再び大正期に遡ることになるが、日本プロレタリア文化運動の草創期を担った雑誌『種蒔く人』は、一九二一年二月に秋田土崎で創刊され、三号で一旦休刊した後、同年十月に東京版を創刊している。その東京版の表紙にはエスペラント（“LA SEMANTO”＝種を蒔く人）が用いられていたことは広く知られていることであろう。その後も、労働者エスペランティストの国際組織であるSAT（Sennaciaca Asocio Tutmonda 全世界脱民族性協会）の諸雑誌からの記事が『種蒔く人』に訳載されているが、これらを担ったのは、のちにプロレタリア演劇同盟（プロット）を率いる佐々木孝丸であり、彼は秋田雨雀から刺激を受けてエスペラントを学んだといわれている⁽²²⁾。

また、戦前日本のプロレタリア文化運動において、最も勢力を持っていた組織は、ボルシェビズムを標榜し、雑誌『戦旗』を機関誌としたナップであるが、ナップをはじめとする各組織の名称にエスペラント名を与えたのも佐々木孝丸であるということである⁽²³⁾。エスペラント名を戴くことにより、国際的連帯を実現しつつある文化団体であることを国内外にアピールし、『文芸戦線』派との差異化を図るという狙いもあったのではないだろうか。

それでは、ここから、佐々木孝丸をエスペランティストへと導いたポエウの創立者

の一人であり、国際文化研究所所長、プロレタリア科学研究所所長として、プロレタリア・エスペラント運動に深く関わった秋田雨雀について整理してみたい。

『日本エスペラント運動人名事典』（柴田巖・後藤斉 編 峰芳隆 監修 ひつじ書房 2013年10月）によると、雨雀とエスペラントとの出会いは、二葉亭四迷の『世界語』と、ローマ字で詩を書いていた同郷の詩人・鳴海要吉を通じたものであったということだが、最も大きなターニング・ポイントとなったのは、一九一四年二月の、盲目のロシア詩人エロシェンコ（1890－1952）との出会いであり、雨雀は、エロシェンコと出会ったその翌日からエスペラントの学習を始めたという。

雨雀のエロシェンコへの傾倒は、盲目であった彼の父にエロシェンコの姿を重ね合わせたからであるとされるが、雨雀にとって、父親はどのような存在であったのか、雨雀自身の言葉を引いてみたい。

中村武羅夫『現代文士二十八人』（日高有倫堂 1909年7月）の「附録」である「如何にして文壇の人となりしか」に収載された雨雀の文章には、雨雀の父が「十幾歳の時、或る家庭上の事情によって失明し」ており、雨雀が生まれた時には既に盲人であったことが記され、「私は父が目の見えない代りに、二人前目を開きたい。暗い家庭の代りに、何か新しき光のある処へ行きたいと云ふ二種の希望と憧憬とに始終刺撃せられてゐた。」という思いを抱いていたことが告白されている。また、特に目を惹くのは、次のような箇所であろう。

私の小さい時から、私の家へは眼の見えない此地方の種々な人が入込んだ。私の父は此地方の漢学者小野川某及び吉田某と云ふ人等から漢書を教わつた。そして其の中の四十巻は殆んど完全に近く暗誦してゐたところから、目の見えない人々に其れを教へたり、話をしたりする事を好んでゐた。だから私は其の傍らにゐて、父の話をきき、或は父の所へ集つて来る多くの盲人の群に抱かれて、種々な恐ろしい話とか、可笑い物語とかを聞いたものである。（中略）中でも色の白い半分眼の見える男があつて、八犬伝の話をば一年ばかりも続けて私の耳に入れて呉れた。斯う云ふ刺戟は一種のローマスンと云ふものを欲するようにさせたのである。

（秋田雨雀「如何にして文壇の人となりしか」／中村武羅夫『現代文士二十八人』日高有倫堂 1909年7月）

盲目であることに甘んじず、強い向学心を持ち、深い教養を身につけるだけではなく、それを他の人々と分かち合うコミュニケーション能力を持った父に恵まれた雨雀は、幼い日、父の友人である盲目の人々に抱かれて数々の物語を聞く。その「刺戟」が雨雀の文学的教養となったことは、雨雀自身も認識している。このような温かみの

ある体験が、身体の手ディキャップという表面的なものにとらわれず、その人間の内面を見通す術を育んだからこそ、雨雀はエロシェンコによって身体を通じて蓄積した記憶を呼び起こされ、人間として、そして芸術家としての彼の内面の豊かさに深く惹かれたのであろう。

また、雨雀は、先に挙げた『現代文士二十八人』において、中学時代から自身の出自を恥じ、「階級なるものを打破してつて」「自由の生活に行きたいと云ふ猛烈な反抗」を持っていたということを語っている。元々医師であった父は、雨雀を医者にしたいと考えており、雨雀自身も、中学時代に発狂した教師がいたことから、彼を「治してやりたい」という気持ちになり、医者を志していたと語っている。しかし、シェークスピアをはじめとする文学と出会い、「心の中に生ずる一種の世界、一種の国、即ち凡ての社会状態以外に、矢張り一種の自由な国が出来得るものならば、其の国を創造するには、どんな性質のものでもやつて見ようと思ふ」という心境に至ったと述べている。

「階級なるものを打破」し、「自由の生活に行きたい」、「一種の自由な国を創造」りたいという一九〇九年時点の雨雀の言葉と、弱者への温かな眼差し、そしてこの後の彼の歩みを思い合わせると、彼がプロレタリア・エスペラント運動に邁進するのは資質的に必然であったと思われる。

なお、エロシェンコは、一九二一年、神田のYMCA大講堂で行った講演「禍の盃」で日本の植民地支配を批判したことにより、社会主義運動を取り締まる当局からソビエトのスパイの嫌疑をかけられ強制送還されてしまうが、雨雀の行動は早く、その年のうちにエロシェンコ創作集『夜明け前の歌』（叢文閣版 1921年）をまとめるなど、エロシェンコの作品と存在を日本で広めることに尽力した。その後、雨雀が活動を新劇運動に留まらず、国際文化研究所所長、プロレタリア科学研究所所長として、プロレタリア・エスペラント運動を牽引してゆくことから、エロシェンコとの出会いがいかに雨雀にとって決定的なものであったかが窺える。

先にも述べたが、雨雀は一九二七年にモスクワを訪ね、実際にエスペラントを駆使する体験もしている。その見聞録ともいえる「ソウェート・ロシヤに於けるエスペラント運動」（『若きソウェート・ロシヤ』叢文閣 1929年10月）では、モスクワのピオニーロで目の当たりにした「所謂 natura metodo（自然教授法）」を用いたエスペラント教育についても記されており、これは今日的にみても貴重な記録であるといえるだろう。

ところで、エロシェンコが日本を去った二年後の一九二三年に起こった関東大震災は、文化的にも旧時代の終焉をもたらすという役割を担ったが、同時に帝国日本国民の被植民地の民族に対する暴力性を浮き彫りにしてみせた。震災の混乱に紛れて、自警団による朝鮮人虐殺、亀戸事件、そして大杉栄・伊藤野枝、大杉の甥の橘宗一まで

もが惨殺されるという筆舌に尽くしがたい事件が起こったのである。まさに、エスペラントの生みの親であるザメンホフが、故郷の街で経験させられた〈ボグロム〉と同様の、支配者層と民衆が手を組んで行われた虐殺であったが、先に述べたように、中立主義の日本のエスペラント運動は、この事件に関し沈黙をきめこんでいた。

しかし、雨雀は、この朝鮮人虐殺をモチーフに、戯曲「骸骨の舞跳」(『演劇新潮』1924年4月)を発表するという形で応酬する。なお、梗概は次のようなものである。

震災後、M駅に仮設された救護班のテント内で、震災で娘と孫を失い、北海道を目指す〈老人〉と、青森へ向かう〈青年〉が「朝鮮人が火をつけて歩いているという噂」について話している。〈青年〉はその噂は真実ではないが、そのために沢山の朝鮮人が殺されていることは真実であるとし、日本人への失望を語り、「あの人達(日本人)には自信がないんです。他人の着せた衣服を大事に着てゐるだけです。」(括弧：引用者)と言う。その後、患者を軽くあしらう〈看護婦〉が登場し、〈避難民〉は苛立たしさを露わにする(この〈看護婦〉の態度は医長の方針による)。さらに、「白襟紋付」に「豪気な指輪」を嵌めた市長の妻〈貴婦人〉も登場し、寄付金とわずか五本のサイダー、林檎を〈避難民〉に与え、去る。それを見た〈青年〉は、「物を呉れる人の心持」の醜さを指摘する。その後〈救護班員〉が、朝鮮人が押し寄せてくるという情報を持ってきたために、テント内は動揺する。一方〈青年〉は、朝鮮人には武器がないこと、荒唐無稽な話だと一蹴し、再び「日本人に自信がないからです!」と断言する。それを聞いた〈避難民〉が、〈青年〉を「朝鮮人だ」とし、攻撃しようとしたところ〈医長〉が登場し、帝国の軍隊が出動命令を待っている旨を伝えた途端、〈避難民〉は安心する。しかし間もなく、甲冑や陣羽織という時代錯誤な装束を身にまとった〈自警団〉がテントにやってくる。〈自警団〉はテントの中に朝鮮人が潜んでいるとし、〈ある男〉を捕まえ質問攻めにする。それに対し、〈青年〉が立ち上がる。〈青年〉から放たれた「新しい神秘」により、〈自警団〉は次々と化石した醜い骸骨となる。〈青年〉は虐殺された死者のためのワルツを骸骨に跳らせ、死者たちは笑う。以上が、この戯曲のプロットである。

避難民に対し自己満足的な施しをする〈貴婦人〉や、避難民の心身の苦しみに寄り添うことをまったくしない医療関係者、そして何より、中身の無い情報にいたずらに踊らされ、いとも簡単に朝鮮人=悪という構図を呑み込み、暴力性を発揮するリテラシーの低い民衆に対する激しい批判が顕れた戯曲であるといえよう。

雨雀は、民族差別を批判する人間に対し「不逞」や「主義者」や「危険人物」というレッテルを貼り、暴力をほしいままにする人間たちとは、「自信がな」く、「卑劣なる祖先崇拜の虚偽」「英雄主義」「民族主義」の「仮面」を被った存在であり、一旦それを剥ぎ取ってしまうと、血も流れない「生命のない繰人形」—すなわち「骸骨」でしかないということを訴えている。前掲の中垣論文が、日本語が「ゴマカシ」の効く

言語であり、だからこそ日本語批判を可能にするためのエスペラントを習得し、リテラシーを高めるよう主張したものであったことも思い起こされるであろう。

また、雨雀が、テント内の舞台美術について「所謂マヴォ式の試みも面白いであろう」と述べていることや、骸骨となった自警団の「舞跳」の場面の斬新な演出についても細かく記していること、作品の最後には執筆の日時がエスペラントで記され、エスペランティストとしての立場が表明されていること、そして一九二七年には、この作品が“Danco de skeletoj”としてエスペラント訳されていることも押さえておくべきである⁽²⁴⁾。

つまり、「骸骨の舞跳」は、エスペランティスト秋田雨雀と、日本帝国主義にいても容易く呑み込まれ、他民族を圧迫する民衆の姿を前衛的な手法で浮き彫りにしてみせたプロレタリア劇作家秋田雨雀とが決して矛盾するものではないことの宣言としての側面を有した作品となったともいえ、後の雨雀の、プロレタリア・エスペラント運動へのコミットを暗示しているとも考えられるのである。

文学、美術、音楽等が融合し、国境を超える総合芸術である演劇のなかでも、特にプロレタリア新劇は柔軟な前衛性が求められるジャンルであると思われるが、プロレタリア・エスペラント運動と演劇人との結びつきが多々みられることは興味深く感じられる。

先に触れた佐々木孝丸も演劇人であることはもちろん、山形でプロレタリア・エスペラント運動やローマ字普及運動に従事した言語学者・斎藤秀一が一九三八年に特高に逮捕された原因の一つが、演劇オリムピードに派遣される予定であったプロレタリア作家同盟の池田勇作（斎藤と同郷）後援基金に申し込んだことにあったとされていることも想起されよう⁽²⁵⁾。

また、一九三九年に上演された久板栄次郎の戯曲「神聖家族」（初演：1939年4月18日～5月7日／上演：新協劇団／演出：村山知義／於：築地小劇場）の主人公〈フキ子〉も、エスペラントを学んだ経験を持つ元活動家という設定であり、流暢なプロレタリア・エスペラントを披露する場面もある。左翼運動が息の根を止められた戦時下において、劇中とはいえ、「鉄工場で毎日働く貧しい労働者」を意味するエスペラント例文を読み上げるという演出は精一杯の抵抗の表現であり、劇的效果は相当なものだったのではないかと想像される。これらのことから、プロレタリア文化運動におけるエスペラントと演劇の関係性の掘り下げは今後の課題といえるだろう。

* * * * *

大正末期に種が蒔かれ、昭和初期に花開いた戦間期のプロレタリア・エスペラント運動は、単なる語学普及運動ではなく、ラディカルな政治性とプロレタリア科学、そして芸術とのアマルガムを目指したハイブリッドなあり方を模索していた文化運動であったと思われる。

なお、弾圧から一時的に逃れえたエスペランティストたちのなかには、ポエウの教条主義を改善し、『マルシュ』(MARŠU = 進め)を刊行した中塚吉次や、中塚らのグループである神戸のプロレタリア・エスペラント・グループ(マルシュ社)の「文学部のような形で出発した」「マーヤ・ロンド」という文学グループをつくった栗栖継らが出たが、一九三六年から翌年三八年にかけての大弾圧により、中塚をはじめとする多くの有望なエスペランティストは命を奪われることとなる⁽²⁶⁾。

ちなみに「マーヤ・ロンド」は、モルプのエスペラント支部「イアレヴ」の日本支部であり、モルプの日本支部であったナルプ(プロレタリア作家同盟)なきあと「当時モルプが日本に持っていた唯一の組織」としての存在価値を持っていた。また、ポエウにも参加し、のちに中国でエスペラントによる反戦運動を展開したエスペラント文学者・長谷川テルも関与していたグループでもある⁽²⁷⁾。

文学研究の世界でプロレタリア文学が永らく無視されていたのと同様に、ラディカルな政治主義が誤りとされたポエウであるが、ここから多くの優れたエスペランティストが輩出されたことは否定できないであろう。また、日本のポエウをモデルに中国無産階級世界語者聯盟が一九三一年十一月に創立されていることや、長谷川テルや斎藤秀一の活動などをみても、日本のプロレタリア・エスペラント運動が、国境を越える波及力を持ち、自己の信念に対する良心を持続し続けるエスペランティストを育成する土壌を涵養していたことは確かである。そして、国際化が叫ばれる一方で英語偏重主義が幅をきかせる現在、真の国際化とはいかなるものであるべきかという問いの答えを模索するためにも、エスペラント運動に身を投じ、母語である日本語及び国家としての日本のあり方を客観的に見据え、相対化する視点を獲得した先駆者たちの軌跡に意義を見出すことは不自然ではあるまい。

なお、紙幅の関係で、プロレタリア文学に描かれたエスペラント運動及び、プロレタリア・エスペラント運動が生み出したエスペラント文学者、そして先に述べたプロレタリア文化運動におけるエスペラントと演劇の関係性などを掘り下げることができなかったが、これらは次回の課題とさせていただきたい。

《注》

- 1 講談社選書メチエより、2018年5月に刊行されている。
- 2 「日本が初めて世界と「同期」した大正時代の「可能性」／大型対談「大正とは何か」 第一回」2018年5月11日 最終アクセス2020年2月2日 <https://courrier.jp/columns/121051/>
- 3 本多秋五『「白樺」派の文学』(新潮文庫、1960年)、P.14.
- 4 臼井吉見『現代日本文学史・大正』序(『現代日本文学全集』筑摩書房版別巻一、1959年)

- 5 松尾尊兌『大正デモクラシーの群像』（同時代ライブラリー35, 岩波書店, 1990年), P.200-204.
- 6 ロマン・ロラン, 山口小静訳「人類解放の武器はエスペラント」(山口小静『匈牙利の労農革命』水曜会出版部, 1923年)
- 7 工藤美知尋『特高に奪われた青春 エスペランティスト斎藤秀一の悲劇』(芙蓉書房出版, 2017年), P.81-82.
- 8 ウルリッヒ・リンス, 栗栖継訳『危険な言語』(岩波新書, 1975年), P.108.
- 9 田中克彦『エスペラント—異端の言語』(岩波新書, 2007年), P.121-123.
- 10 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』(三省堂, 1987年), P.9-10.
- 11 “UNITED STATES HOLOCAUST MEMORIAL MUSEUM HOLOCAUST ENCYCLOPEDIA” <https://encyclopedia.ushmm.org/content/ja/article/pogroms> (最終アクセス2020年1月25日)によると, ポグロム (погром) とは, 暴力的に破壊させるという意味。
歴史的には, ロシア帝国のユダヤ人以外の市民が地元のユダヤ人に対して行う暴力的な攻撃を意味する。ポグロムの実行者は, 政府や警察に奨励されながら地元で組織を編成していたとされる。
- 12 大島・宮本 (1987年), 前掲書, P.166.
- 13 栗栖継「知られざる長谷川テル〈下〉」(『月刊 状況と主体』218号, 1994年2月), P.121.
- 14 栗栖継「『蟹工船』をエスペラント訳した頃」(『カオスとロゴス』9号, 1997年9月), P.91.
- 15 大島・宮本 (1987年), 前掲書, P.165.
- 16 元東大新人会メンバーで共産党員の西田信春 (1903-33) は, 1929年の〈四・一六〉事件で市谷刑務所に収監中, エスペラントを独習している。中野重治からの差し入れで『プロレタリア・エスペラント講座』第一巻も読んでいるが, 期待外れであったことを次のように書き送っている。
「エス語の講座も有難う。早速読み了つた。僕の頭の悪いせゐかしらないが, 非道く読みづらくて, 途中で何度息をついたかも知れない。理論がもう何とも云へない程小難しく述べられてあるんだ。(中略) 携帯に便に, 何処へでも持つて行ける様に四六判にしたんだらうが, 目がチク／＼して了ふ。(中略) 此の前の君の手紙だとエスペラントが何だかもう大分实际的に用ひられさうな兆が見えたと言ふ様なことが書いてあつたと記憶してゐるが, 而し此は一体どんな事を具体的に言つてゐるんだらう。寧ろ他の処で君が云つてゐる様に, 農村の青年—多くは小ブル的な—の間に可成講座が入つてゐると云ふ事実の方が真理に近いだらうと想像してゐる。日本でエスペラントが労働運動に貢献しうる範囲, 程度なんて微少なものだと思ふ。その明日の価値を今日の価値と可成混同したら, 飛んだ過大な評価をしてすふ危険が多分にあるな」(中野重治宛1931年3月25日)
前衛的活動家からみたプロレタリア・エスペラント運動の評価の一例であるが,

テキストのなかでも大きな比重を占める理論パートは、知識人にとっても骨の折れるものであったようである。

西田は第一巻のみで見切りをつけ、次巻以降は頼まなかった。

(書簡の引用は、石堂清倫・中野重治・原泉編『西田信春書簡・追憶』土筆社1970年に拠る。)

- 17 「戦前，エスペラント運動が弾圧された理由は？」(『しんぶん赤旗』2005年3月31日(木) 日本共産党ホームページ<http://www.jcp.or.jp/akahata/> 最終アクセス2020年2月2日)
- 18 リンス (1975年)，前掲書，P.108.
- 19 神村和美「小林多喜二の反戦思想と二十一世紀の〈反戦〉〈平和〉－二つの震災が及ぼした国難と多喜二の反戦活動を視座に」(『多喜二奪還事件80周年記念論文集』伊勢崎・多喜二祭実行委員会 2011年)，P.78.
- 20 神村和美 (2011年)，前掲論文，P.78-81.
- 21 リンスの前掲書 (1975年) P.108-115には、「^{ボエウ}PEU」が「日本のエスペラント運動の伝統的な寛容性に違反」したことで弾圧を招いたという叙述がみられるほか、左翼的エスペランティストたちがエスペラントの理念的側面を強調しすぎて特高を刺激したといった「内部的誤り」も指摘されている。また、リンスは、日本ではエスペラントが「危険な言語」としての烙印を押されたことはなく、当局のテロも偶発的なものであり、計画的におこなわれてはいなかったと述べており、弾圧した側を擁護する姿勢が窺える。
- 22 大島・宮本 (1987年)，前掲書，P.137.
- 23 大島・宮本 (1987年)，前掲書，P.139.
- 24 「骸骨の舞跳」は、新人会メンバーであった守随一によりエスペラント訳された(発行：JEI)。
 なお、注16でも触れた元新人会メンバー西田信春は、1931年1月19日付の中野重治宛獄中書簡において、「近日エスペラントをやる様になつてから、嫌と云ふ程目につく秋田雨雀の“骸骨の舞踏”を読んだ、Verkačo^{ママ}なのに驚かされた。」(Verkačo = 愚作)と否定的な見解を記している。プロレタリア・リアリズムとかけ離れたプロット、演出に対する当時の活動家の率直な感想とも考えられる。
- 25 工藤 (2017年)，前掲書，P.71., P.155.
- 26 栗栖継「長谷川テルと私〈中〉」(『月刊 状況と主体』227号，1994年11月)，P.139. 及び大島・宮本 (1987年)，前掲書，P.179-197を参照。
- 27 栗栖 (1994年11月)，前掲論文，P.140.

《参考文献》

- 棚沢健「言語の錯乱」(『日本文学』第63巻，2014年11月)
- 中川成美・村田裕和〔編〕『革命芸術 プロレタリア文化運動』(森話社，2019年)
- 小林司『ザメンホフ 世界共通語を創ったユダヤ人医師の物語』(原書房，2005年)

【附記】秋田雨雀「骸骨の舞跳」の引用は、『骸骨の舞跳』（叢文閣版 1925年）及び伏字部分は榎沢健編『アンソロジー・プロレタリア文学4 事件』（森話社 2017年）所収「骸骨の舞跳」に拠る。

山口小静『匈牙利の労農革命』、『カマラード』の引用は日本エスペラント協会にご協力いただいた。ここに謝意を示したい。

なお、本研究は本学学長所管研究奨励金の助成を受けたものである。